

# 三尺角

泉鏡花

青空文庫



「……………」

山には木樵唄、水には船唄、駅路には馬子の唄、渠等はこれを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れて屈託なくその業に服するので、恰も時計が動く毎にセコンドが鳴るようなものである。またそれがために勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を挙げるに齊しい、曳々！と一斉に声を合わせるトタンに、故郷も、妻子も、死も、時間も、慾も、未練も忘れるのである。

同じ道理で、坂は照る照る鈴鹿は曇る〓といい、袷遣りたや足袋添えて〓と唱える場合には、いずれも疲を休めるのである、無益なものおもいを消すのである、寧ろ苦勞を紛らそうとするのである、憂を散じよう、恋を忘れよう、泣音を忍ぼうとするのである。

それだから追分が何時でもあわれに感じらるる。つまる処、卑怯な、臆病な老人が念仏を唱えるのと大差はないので、語を換えて言えば、不残、節をつけた不平の独言である。

船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、この木挽は唄を謡わなかつた。

その木挽の与吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで礼拝する如く、上から挽きおろし、挽きおろす。

この度のは、一昨日の朝から懸つた仕事で、ハヤその半を挽いた。丈四間半、小口三尺まわり四角な樟を真二つに割ろうとするので、与吉は十七の小腕だけれども、この業には長けて居た。

目鼻立の愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に向顔巻、三尺帯を前で結んで、南の字を大きく染抜いた半被を着て居る、これは此処の大家の仕着で、挽いてる樟もその持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中についた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれども肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。与吉が身体を入れようという家は、直間近で、一町ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様になつたまま、半ば枯れて、半ば青々とした、あわれな銀杏の矮樹がある、橋が一個。その渋色の橋を渡ると、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦の中へ出入をするので、この船が与吉の住居。で干潮の時は見るも哀で、宛然洪水のあとの如く、何時棄てた世帯

道具やら、欠挿鉢が黒く沈んで、蓬のような水草は波の随意靡いて居る。この水草はまた年久しく、船の底、舷に褫み附いて、恰も巖に苔蒸したかのよう、与吉の家をしつかりと結えて放しそうにもしないが、大川から汐がさして来れば、岸に茂った柳の枝が水に潜り、泥だらけな笹の葉がぴたと洗われて、底が見えなくなり、水草の隠れるに従うて、船が浮上ると、堤防の遠方にすすくと立つて白い煙を吐く此処彼処の富家の煙突が低くなつて、水底のその欠挿鉢、塵芥、檻樓切、釘の折などは不残形を消して、蒼い潮を満々と湛えた溜池の小波の上なる家は、掃除をするでもなしに美しい。

爾時は船から陸へ渡した板が真直になる。これを渡つて、今朝は殆ど満潮だったから、与吉は柳の中で※と旭がさす、黄金のような光線に、その罪のない顔を照らされて仕事に出た。

## 二

それから日一日おなじことをして働いて、黄昏かかると日が暮き、柳の葉が力なく

低れて水が暗うなると汐が退く、船が沈んで、板が斜めになるのを渡つて家に帰るので。

留守には、年寄つた腰の立たない与吉の爺々が一人で寝て居るが、老後の病で次第に弱るのであるから、急に容体の変るといふ憂慮はないけれども、与吉は雇われ先で昼飯をまかなわれては、小休の間に毎日一度ずつ、見舞に帰るのが例であつた。

「じゃあ行つて来るぜ、父爺。」

与平という親仁は、涅槃に入ったような形で、胴の間に寝ながら、仏造つた額を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子が地藏眉の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉しそうに頷いて、

「晩にや又柳屋の豆腐にしてくんねえよ。」

「あい、」といつて苦を潜つて這うようにして船から出た、与吉はずつと立つて板を渡つた。向うて筋違、角から二軒目に小さな柳の樹が一本、その低い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には仮名、一枚には真名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新らしく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを貼替えたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手広く商をするのではなく、八九十軒もあろう百軒足らずのこの部落だけを花主にして、今代

は喜蔵きぞうという若い亭主が、自分で売りに廻まわるばかりであるから、商に出た留守の、昼過ひるすぎは森しんとして、柳の蔭かげに腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸かけて、地の窪くぼんだ、泥濘ぬかるみを埋めるため、一面に貝殻かいがらが敷いてある、白いの、半分黒いの、薄紅うすべに、赤いのも交まじつて堆うずたかい。

隣屋となりはこの辺へんに棟むねを並ぶる木屋の大家で、軒のき、廂ひさし、屋根の上まで、犇ひしと木材を積揃つみそろえた、真中まんなかを分けて、空高そらだかい長方形の透間すきまから凡およそ三十畳も敷けようという店の片端かたはが見える、その木材の蔭になつて、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷々ひやひやとした店前みせさきに、帳場格子ちやうばごうしを控えて、年配の番頭ばんとうが唯一ただ一人帳合ちやうあひをしている。これが角屋かどやし敷きで、折曲おれまがると灰色をした道が一筋ひとすじ、電柱いでんちゆうの著いちじうしく傾いたのが、前まえと後うしろへ、別々に頭かしらを掉ふつて奥深おくぶこう立つて居る、鋼線はりがねが又また半なかだるみをして、廂ひさしよりも低い処ところを、弱々よわよわと、斜しやめに、さもさも衰おとろえた形かたちで、永代えいたいの方かたから長く続いて居るが、凶ずに描かいて線を引くと、文明の程度が段々こつち此方こつちへ来るに従したがうて、屋根越やねこしに鈍にぶることが分るのであろう。

単に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋の袂たもとの銀杏いちじやうの樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の扉も、それ等らに限らず、あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、皆傾みないて居る、傾いて居る、傾いて居るが尽ことごとく一様いちやうな向むきにはなく、或あるものは南の方へ、或

ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てんでんばらばらになって、この風のない、  
 天そらの晴れた、曇くもりのない、水面のそよそよとした、静かな、穏おだやかな日ひな中に処しよして、猶なほ且かつつ暴  
 風に揉もまれ、揺ゆらるる、その瞬間の趣おもむきあり。ものの色もすべて褪あせて、その灰色に鼠ねずみをさ  
 した湿地も、草も、樹も、一部落を蔽おおいつ包おびんだ夥おび多たしい材木も、材木の中を見え透く  
 溜ため池の水の色も、一切いっさい、喪服もふくを着つけたよう、果敢はかなく哀あわれである。

## 三

界隈かいわいの景色がそんなに沈鬱ちんうつで、湿々じめじめとして居るに従したがうて、住む者もまた高たか声こゑで  
 はものをいわない。歩行あるくにも内端うちわで、俯向うつむき勝がちで、豆腐屋も、八百屋やおやも黙もくつて通る。風俗  
 も派手でない、女の好このみも濃厚ではない、髪かみの飾かざりも赤いものは少なく、皆心するともなく、  
 風土の喪に服して居るのであろう。

元来岸の柳の根は、家々の根太ねだよりも高いのであるから、破風はふの上で、切々きれきれに、蛙かわずが  
 鳴くのも、欄干らんかんの壊れた、板のはなればなれな、杭くいの抜けた三角形の橋の上に蘆あしが茂さつ  
 て、虫がすだくのも、船虫ふなむしが群むらがつて往來を駆けまわるのも、工場の煙突えんとつの烟けむりが遙はるか



に見えるのも、洲崎へ通う車の音がかたまつて響くのも、二日おき三日置きに思出したように巡查が入るのも、けたたましく郵便脚夫が走込むのも、鳥が鳴くのも、皆何となく土地の末路を示す、滅亡の兆であるらしい。

けれども、滅びるといつて、敢てこの部落が無くなるという意味ではない、衰えるという意味ではない、人と家とは栄えるので、進歩するので、繁昌するので、やがてその電柱は真直になり、鋼線は張を持ち、橋がペンキ塗になつて、黒塀が煉瓦に換ると、蛙、船虫、そんなものは、不残石灰で殺されよう。即ち人と家とは、栄えるので、恚る景色の倂がなくなろうとする、その末路を示して、滅亡の兆を表わすので、詮ずるに、蛇は進んで衣を脱ぎ、蟬は榮えて殻を棄てる、人と家とが、皆他の光榮あり、便利あり、利益ある方面に向つて脱出した跡には、この地のかかる倂が、空蟬になり脱殻になつて了うのである。

敢て未来のことはいわず、現在既にその姿になつて居るのではないか、脱け出した或者は、鳴き、且つ飛び、或者は、走り、且つ食う、けれども衣を脱いで出た蛇は、残した殻より、必ずしも美しいものとはいわれない。

ああ、まぼろしのなつかしい、空蟬のかような風土は、却つてうつくしいものを産する

のか、柳屋に艶麗な姿が見える。

与吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、岸に上ると、思うともなしに豆腐屋に目を注いだ。

柳屋は浅間な住居、上櫃を背後にして、見通の四畳半の片端に、隣家で帳合をする番頭と同一あたりの、柱に凭れ、袖をば胸のあたりで引き合わせて、浴衣の袂を折返して、寝床の上に坐つた膝に搔巻を懸けて居る。背には綿の厚い、ふつくりした、豎縞のちやんちやんを着た、鬱金木綿の裏が見えて襟脚が雪のよう、艶気のない、赤熊のような、ばさばさした、余るほどあるのを天神に結つて、浅黄の角絞の手絡を弛う大きくかけたが、病気であろう、弱々とした後姿。

見透の裏は小庭もなく、すぐ隣屋の物置で、此処にも犇々と材木が建重ねてあるから、薄暗い中に、鮮麗なその浅黄の手絡と片頬の白いのが、拭込んだ柱に映つて、ト見ると露草が咲いたよう、果敢なくも綺麗である。

与吉はよくも見ず、通りがかりに、

「今日は、」と、声を掛けたが、フト引戻さるるようにして覗いて見た、心着くと、自分が挨拶したつもりの婦人はこの人ではない。

## 四

「居ない。」と呟くが如くにいつて、そのまま通抜けようとする。

ト日があたって暖たかそうな、明い腰障子の内に、前刻から静かに水を掻廻す氣勢がして居たが、ぼったりといつて、下駄の音。

「与吉さん、仕事にかい。」

と婀娜たる声、障子を開けて顔を出した、水色の唐縮緬を引裂いたままの袴、玉のよ  
うな腕もあらわに、蜘蛛の囿を絞った浴衣、帯は占めず、細紐の態で裾を端折つて、布  
の純白なのを、短かく脛に掛けて甲斐甲斐しい。

齒を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉は落さぬ、束ね髪の中年増、喜  
蔵の女房で、お品という。

濡れた手を間近な柳の幹にかけて半身を出した、お品は与吉を見て微笑んだ。

土間は一面の日あたりで、盤台、桶、布巾など、ありつたけのもの皆濡れたのに、薄  
く陽炎のようなのが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の太桶の水の色は、

薄ら蒼く、柳の影が映つて居る。

「晩方又来るんだ。」

お品は莞爾しながら、

「難有う存じます、」故と慇懃にいった。

つかつかと行懸けた与吉は、これを聞くと、あまり自分の素気なかつたのに気がついたか、小戻りして真顔で、眼を一ツ瞬いて、

「ええ、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きようである。

「ほほほ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様はお客様じゃあないかね、お客様なら私ん処の旦那だね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」と柳に手を縫つて半身を伸出たまま、胸と顔を斜めにして、与吉の顔を差覗く。

与吉は極の悪そうな趣で、

「お客様だつて、あの、私は木挽の小僧だもの。」

と手真似で見せた、与吉は両手を突出してぐつと引いた。

「こうやって、こう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様はおかみさんだろう、柳屋のおかみさんじゃねえか、それ見ねえ、此方でお辞儀をしなければりやならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目を睜つて、

「まあ、勿体ないわねえ、私達に何のお前さん……」といいかけて、つくづく瞻りながら、お品はずつと立つて、与吉に向い合い、その襷懸けの綺麗な腕を、両方大袈裟に振つて見せた。

「こうやって威張つてお在よ。」

「威張らなくつたつて、何も、威張らなくつたつて構わないから、父爺が魚を食つてくれると可いけれど、」と何と思つたか与吉はうつむいて悄れたのである。

「何うしたんだね、又余計に悪くなったの。」と親切にも優しく眉を顰めて聞いた。

「余計に悪くなつて堪るもんか、この節あ心持が快方だつていうけれど、え、魚氣を食わねえじゃあ、身体が弱るつていうのに、父爺はね、腥いものに箸もつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえツていうんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出来まいか。」と思出したように唐突にいった。

## 五

「おや、」

お品は与吉がいうことの余り突拍子とつぴようしなのを、笑うよりも先まず驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出来そうなものだなあ。雁がんもどきッて、ほら、種々いろんなものが入った油揚あぶらあげがあらあ、銀杏ぎんなんだの、椎茸しいたけだの、あれだ、あの中へ、え、肴さかなを入れて交まぜツこにするてえことあ不可いけねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いいやね、聞いて見て置まきましようよ。」

「ああ、聞いて見てくんねえ、真個ほんどに肴さかなツ気が無くツちやあ、台なし身体からだが弱るツていうんだもの。」

「何故なぜ父おとつさん上なまくさは腥あがをお食あがりじやあないのだね。」

与吉の真面目まじめなのに釣つりこ込まれて、笑うことの出来なかつたお品は、到頭骨とうとうのある豆腐の注文を笑わずに聞き済すました、そして真顔まがおで尋たずねた。

「ええ、その何だつて、物をこそ言まわねえけれど、目もあれば、口もある、それで生白なましろ

い色をして、蒼いものもあるがね、煮られて皿の中に横になった姿でえものは、さかなさかな魚々  
と一口ひとくちにやあいうけれど、考えて見りやあ生身なまみをぐつぐつ煮着けたのだ、尾頭おかしらのある  
ものの死骸しがいだと思つと、気味が悪くツて食べられねえツて、左様そういうんだ。

詰つまらねえことを父爺ちやんいうもんじやあねえ、山の中の爺婆じじばばでも塩したのを食べるツてよ。  
煮たのが、心こころもち持もちが悪けりや、刺身さしみにして食べないかツていうとね、身震みぶるいをするん  
だぜ。刺身つなツていやあ一寸試いっすんだめしだ、鱈なますにすりやぶつぶつ切りぎりか、あの又目口まためくちのついた天窓あたま  
へ骨つなが繋つなつて肉にくが絡まといついて残る凶あいてなんてものは、と厭いやな顔をするからね。ああ、「とい  
つて与吉うなずは領うなずいた。これは力を入れて対あいて手にその意を得させようとしたのである。

「左様そうなんかねえ、年紀としの故せいもあろう、一ツは気分だね、お前さん、そんなに厭いやがるもの  
を無理に食べさせない方が可いよ、心持こころもちを悪くすりや身体からだのたしにもなんにもならないわ  
ねえ。」

「でも瘦やせるようだから心配だもの。気が着かないようにして食べさせりや、胸むねを悪くす  
ることもなからうからなあ、いまの豆腐とうふの何よ。ソレ、」

「骨ほねのあるがんもどきかい、ほほほほほ、」と笑つた、垢あかぬ抜けのした顔かほに鉄漿かねを含んで  
美しい。

片類かたはに触れた柳の葉先を、お品はその艶つややかに黒い前歯くわで銜くわえて、扱こくようにして引断ひつきった。青い葉を、カチカチと二ツばかり噛かんで手に取つて、掌てのひらに載せて見た。トタンかまちに框かまちの取とつきつきの柱むちに凭もたれた浅黄あさぎの手絡てがらが此方こつちを見向みまく、うら少わかいのと面おもてを合あわせた。

その時までには、殆ほとんど自分で何をするかに心着こころづいて居いないよう、無意識むいしの間まにして居いたらしいが、フト目を留とどめて、俯向うつむいて、じつと見て、又梢こすえを仰あいで、

「与吉さんのいうようじゃあ、まあ、嗚さぞこの葉も痛むこつたろうねえ。」

と微笑ほほえんで見せて、少すずいのがその清すずい目に留とどめると、くるりと廻まわつて、空そらさまに手を上げた、お品はすつと立つて、しなやかに柳の幹みきを叩たたいたので、蜘蛛くもの巢ねの乱れた薄い色の浴衣たもとの袂たもとは、ひらひらと動いた。

与吉は半被はつびの袖そでを搔かきあわせて、立つて見て居いたが、急に振返かえつて、

「そうだ。じゃあ親方に聞いて見ておくんな。可かいかい、」

「ああ、可かいとも、」といつて向直むかつて、お品は搔かく潜くぐつて襷たすきを脱はずした。斜けめに袈裟けさになつて結目むすびめがすらりと下さる。

「お邪魔申まじましました。」

「あれだよ。又、」と、莞爾にっこりしている。



「そうだつけな、うむ、此方こつちあお客だぜ。」  
 与吉は独ひとりで頷いたが、背うしろむき向むきになつて、肱ひじを張つて、南なんの字の印が動く、半被の袖をぐツと引いて、手を掉ふつて、  
 「おかみさん、大威張おおいばりだ。」  
 「あばよ。」

## 六

「あい、」といいすてに、急足いそぎあしで、与吉は見る内うちに間近まぢかな淡色の橋の上を、黒い半被はつぴで渡つた。真中まんなか頃ころで、向岸から駆けて来た郵便脚夫きやくふと行合ゆきあつて、遣違やりちがいに一緒になつたが、分れて橋の両端りょうはしへ、脚夫はつかつかと間近に来て、与吉は彼かの、倒れながらに半ば黄ばんだ銀杏いちじょうの影に小さくなつた。

## 七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗あらい髪がみのお品は、手足の真ま黒くろな配達夫が、突つき当あたるように目の前に踏留ふみとどまって棒立ぼうだちになつて喚わめいたのに、驚いた顔をした。

「更さら科しなお柳さん、」

「手前てまへでもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上うわがき書かをじつと見ながら、片手を垂れて前まえ垂たれのさきを抓つまんで上げつつ、素足はに穿はいた黒緒くろおの下駄くまを揃そろえて立つたが、一寸ちよつとかえ翻かえして、裏の名を讀むと、顔の色が動いて、横目かまちに框かまちをすかして、片頬かたほに笑えみを含んで、堪たまらないといったような声で、

「柳ちゃん、来たよ！」というが疾はやいか、横よこざまに駆かけて入いる、柳腰やなぎこし、下駄くまが脱だげて、足の裏うらが美しい。

## 八

与吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直すぐそのまま材木の前に跪ひざまずいて、鋸のこぎりの柄えに手

を懸けた時、配達夫は、此処の前を横切つて、身を斜に、波に揺られて流るるような足取りで、走り去つた。

与吉は見も遣らず、傍目も触らないで挽きはじめる。

巨大なるこの樟を濡らさないために、板屋根を葺いた、小屋の高さは十丈もあるう、脚の着いた台に寄せかけたのが突立つて、殆ど屋根裏に届くばかり。この根際に膝をついて、伸上つては挽き下ろし、伸上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上下にあらわれて、両手をかけた与吉の姿は、鋸よりも小さいかのよう。

小屋の中には単こればかりでなく、両傍に堆く偉大な材木を積んであるが、その嵩は与吉の丈より高いので、纔に鋸屑の降積つた上に、小さな身体一ツ入れるより他に余地はない。で恰も材木の穴の底に跪いてるに過ぎないのである。

背後は突抜けの岸で、ここにも地と一面な水が蒼く澄んで、ひたひたと小波の畝が絶えず間近う来る。往来傍には又岸に臨んで、果しなく組違えた材木が並べてあるが、二十三十ずつ、四ツ目形に、井筒形に、規律正しく、一定した距離を置いて、何処までも続いて居る、四ツ目の間を、井筒の彼方を、見え隠れに、ちらほら人が通るが、皆黙つて歩行いて居るので。

淋しみい、森しんとした中に手拍子てびょうしが揃そろつて、コツコツコツコツと、鉄槌かなづちの音ねのするのは、この小屋ここのに並なんだ、一棟ひとむね、同一材木納屋おなじなやの中で、三個さんこの石屋いしがこいが、石いしがこいを鑿きるのである。

板いた 囲がこいをして、横よこに長い、屋根やねの低い、湿ぬつた暗くらい中で、働まいて居まるので、三人さんにんの石屋いしがこいも齊ひとしく南屋みなみやに雇かわれて居まるのでけれども、渠等かれらは与吉よきちのようなのではない、大工だいこうと一いっしょ所に、南屋みなみやの普請ふしんに懸かつて居まるので、ちようと与吉よきちの小屋ここのと往來まむこを隔まてた真向まむこうに、小さな普請ふしん小屋ここのが、真ま 新あたらしい、節穴ふしあなだらけな、薄板うすいたで建たつて居まる、三方さんほうが囲かこつたばかり、編あんで繫ないだ繩なわも見みえ、一杯ひの日当ひあたりで、いきなり土つちの上うへへ白木しろぎの卓子テエブルを一脚す据すえた、その上うしろには大土瓶おおとびんが一個、茶ちや 吞茶のみぢやわん 碗わんが七個ななつ 八個やつ。

後うしろに置おいた腰掛台こしあしだいの上うへに、一人ひとりは匍匐はらばいになつて、肱ひじを張ひつて長々ながと伸のび、一人ひとりは横よこぎまに手枕てまくらして股引ももひき穿かいた脚かかを屈かめて、天窓あたまをくツツつけ合あつて大工だいこうが寝ねそべつて居まる。

普請ふしん小屋ここのと、花崗石みかげいしの門もん 柱ばしらを並なべて扉かが左右さゆうに開あいて居まる、門もんの内うちの横手よこての格子こうしの前まへに、萌黄ももぎに塗ぬつた中に南みなと白しろで抜ぬいたポンプポンプが据すつて、その縁ふちに釣つり 棹さしと畚ふことがぶらりと懸かつて居まる、真まにも静しずかな、大家たいけの店前みせさきに人ひとの氣勢けはいもなない。裏庭うらにわとおもうあたり、遙とほか奥おくの方かたには、葉はのやや枯かれかかつた葡萄棚ぶどうだなが、影かげを倒たにうつして、此処ここもおなじ溜た池いけで、門もんのあたりから間近まぢかな橋はしへかけて、透間すきまもなく乱らん 杭くわいを打うつて、数かず 限かぎもなない

材木を水のままに浸してあるが、彼処へ五本、此処へ六本、流寄った形が判で印した如く、皆三方から三ツに固つて、水を三角形に区切つた、あたりは広く、一面に早苗田のようである。この上を、時々ばらばらと雀が低う。

## 九

その他に此処で動いてるものは与吉が鋸に過ぎなかつた。

余り静かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎にぼろぼろと落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだろう、)とおもいながら膝をついて、伸上つて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極めて軽く、材木の一処から湧くようになって、肩にも胸にも膝の上にも降りかかる。トタンに向うぎまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨のような微な響が、寂寞とした巨材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、与吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がったまま、皿の中に残るのだ、)

と思ひながら、絶えず拍子にかかつて、伸縮に身体の調子を取つて、手を働かす、鋸が上下して、木屑がまた溢れて来る。

(何故だろう、これは鋸で挽く所為だ、)と考へて、柳の葉が痛むといったお品の言が胸に浮ぶと、又木屑が胸にかかつて。

与吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた周囲は、杉の香、松の匂に包まれた穴の底で、目を睜つて、跪いて、鋸を握つて、空ざまに仰いで見た。

樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏れてちらちらする日光に映つて、言うべからざる森厳な趣がある。この見上ぐるばかりな、これほどの丈のある樹はこの辺でついぞ見た事はない、橋の袂の銀杏は固より、岸の柳は皆短い、土手の松はいうまでもない、遙に見えるその梢は殆ど水面と並んで居る。

然も猶これは真直に真四角に切たもので、およそ恠る角の材木を得ようというには、杣が八人五日あまりも懸らねばならぬと聞く。

那な大木のあるのは蓋し深山であるう、幽谷でなければならぬ。殊にこれは飛驒山から廻して来たのであることを聞いて居た。

枝は蔓つて、谷に亘り、葉は茂つて峰を蔽い、根はただ一山を絡つて居たろう。

その時は、その下蔭は矢張こんなに暗かったか、蒼空に日の照る時も、と然う思  
 つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔の、小さな蟻のようなものが、偉大なる材木  
 を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、  
 (父親は何うしてゐるだろう、) と考えついた。

鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は弥六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あの、船の傍を漕いで通りす  
 がりに、父上に声をかけてくれる時分だ、)

と思わず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。

溜池の真中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着た、脊の低い親仁が、腰  
 を曲げ、足を突張つて、長い棹を繰つて、画の如く漕いで来る、筏は恰も人を乗せて、油  
 の上をこるよう。

すると向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を掠めて、蒼い水の上を鷗  
 が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

「与太坊、父爺は何事もねえよ。」と、池の真中から声を懸けて、おやじは小屋の中を覗こうともせず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈んだ筏を棹さして、この時また中空から白い翼を翻して、ひらひらと落ちて来て、水に姿を宿したと思うと、向うへ飛んで、鵠の去った方へ、すらすらと流して行く。

これは弥六といつて、与吉の父翁が年来の友達で、孝行な児が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりにその消息を伝えるのである。与吉は安堵して又仕事にかかった。

（父親は何事もないが、何故魚を喰べないのだろう。左様だ、刺身は一寸だめしで、鱈はぶつぶつ切だ、魚の煮たのは、食べると肉がからみついたまま頭に繋つて、骨が残る、彼の皿の中の死骸に何うして箸がつけられようといつて身震をする、まったくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切ると痛むのだ、）と思ひ思ひ、又この偉大なる樟の殆ど神聖に感じらるるばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほのぼのと見える材木から又ばらばらと、ばらばらと、其処ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思わず耳を澄まして聞いた。中



央もくめの木目から渦うずまいて出るのが、池の小波のひたひたと寄する音の中に、隣の納屋の石を切る響ひびきに交つて、繁つた葉と葉が擦すれあ合うようで、たとえば時雨しぐれの降るようで、又無数の山やまあ蟻りが谷の中を歩あ行く蹺あしおと音のようである。

与吉はとみこうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝ひざの上ひざます、跪ひざますいてる足あいだの間に落溜おちたまつた、堆うずたかい、木屑こくずの積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今までその上について暖あたかだつた膝ひざ頭がしらが冷ひやひや々とする、身体からだが濡ぬれはせぬかと疑つて、彼あちこちそでえり処こちそでえり袖襟そでえりを手で拊はたいて見た。仕事最中、こんな心こころもち持もちのしたことは始めてである。

与吉は、一人谷のドン底どんぞこに居るようで、心細くなつたから、見透みすかす如く日の光を仰いだ。薄い光線うすけんが屋根板やねいの合目あわせめから洩もれて、幽かすかに樟に映つたが、巨大なるこの材木ざいぼくは唯ただ単だんに三尺角さんじやくかくのみのものではなかつた。

与吉は天日あまひを蔽おほう、葉の茂つた五抱いつかかえもあろうという幹みに注連繩しめなわを張つた樟の大樹たいじゆの根ねに、恰あたかも山の端はと思とう処ところに、シツきりなく降りかかる翠みどりの葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは真暗まつくらな処ところに、虫ちいさよりも小な身体みで、この大木の恰あたかもその注連繩しめなわの下あたりに鋸のこぎりを突つきさして居るのに心着こころいて、恍惚うつとりとして目を睜みはつたが、気が遠くなるよ  
うだから、鋸のこぎりを抜ひこうとすると、支つかえて、堅かく食入くくいつて、微かすかにも動うかぬので、はツと思

うと、谷々、峰々、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、数千仞の谷底へ、真倒さまに落ちたと思つて、小屋の中から転がり出した。

「大変だ、大変だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙なみだ声こゑで、枕あかも上あらぬ寢床ねどの上の露草つゆくさの、ガツくりとして仰向あおむけの淋さびしい素顔すゝかほに紅べにを含んだ、白い頬ほに、蒼あおみのさした、うつくしい、妹いもうとの、ばさばさした天神てんじん鬚まげの崩たふれたのに、浅黄あさぎの手絡てがらが解とけかかつて、透すきとお通とおるように真白まっしろで細ほそい頸うなじを、膝ひざの上に抱かかいて、抱かかえながら、頬ほ摺すりしていった。お品しやくが片手ひとてにはしっかりと前刻さつきの手紙てがみを握にぎつて居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しっかりと。お手紙にも、そこらの材木まいたけに枝葉えだがさかえるようなことがあつたら、夫婦ふうふに成なつて遣やるツて書いてあるじゃあないか。

親おやの為ためだつて、何なにだつて、一旦いったん他の人ひとに身みをお任せまかせだもの、道理もつともだよ。お前まへ、お前まへ、それで氣きを落おしたんだけれど、命いのちをかけて願ねがつたものを、お前まへ、それまでに思おもうものを、柳やなぎちゃん、何なにだつてお見捨みすてなさるものかね、解わかつたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可いいよ。大丈夫だいじゆうだよ。願ねがは叶かなつたよ。」

「大變だ、大變だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂った、大變だ、枝が出来た。」  
 と普請ふしんじや小屋、材木納屋の前で叫び足らず、与吉は狂氣の如く大声で、この家の前をも呼よわって歩行あるいたのである。

「ね、ね、柳ちゃん——柳ちゃん——」  
 うつとりと、目を開あいて、ハヤ色の褪あせた唇くちびるに微笑ほほえんで頷うなずいた。人に血を吸われたあわれな者の、将まさに死まじなんとする耳みみに、与吉は福ふく音いんを伝つたえたのである、この与吉のようなものでなければ、實際じつじまた恚いかる福音ふくいんは伝つたえられなかつたのであろう。



## 青空文庫情報

底本：「化鳥・三尺角 他六篇」岩波文庫、岩波書店

2013（平成25）年11月15日第1刷発行

2015（平成27）年5月15日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日

初出：「新小説 第四年第一巻」

1899（明治32）年1月1日

※表題は底本では、「三尺角《さんじやくかく》」となっています。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年6月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 三尺角

## 泉鏡花

2020年 7月18日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>